ゆっくり・ゆったり・のんびり

土　岐　留美江

1．はじめに

速度や動作が緩慢な様子を表す言葉には「遅い」、「のろい」、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」、「緩やかだ」などがある。このうち本稿では、用法の類似している「ゆっくり」「ゆったり」「のんびり」を取り上げて考察を行い、意味・用法の差異を明らかにしながら、各々の語の意義素を取り出すことを目的とする。

2．辞書の記述

『日本国語大辞典』、『新明解国語辞典 第四版』では「ゆっくり」「ゆったり」「のんびり」をそれぞれ次のように記述している。

『日本国語大辞典』

「ゆっくり」(「と」を伴って用いることもある。)

①動作や気持ちにゆとりがあるさまを表わす語。のんびりとくつろいでいるさま。ゆるゆる。(例文省略、以下同様。)

②動作などが遅いさまを表わす語。急がないさま。ゆるゆる。

③余裕が十分にあるさまを表わす語。状態などにゆとりのあるさま。

「ゆったり」(多く「と」を伴って用いる)

①窮屈でなく、ゆとりのあるさまを表わす語。ゆるやかなさま。たっぷり。

②落ち着いてあせらないさまを表わす語。のんびりとくつろいださま。おうようなさま。

「のんびり」(「と」を伴って用いることもある)

束縛がなく、心身ともにくつろいでゆったりとしたさまを表す語。のびのび。

『新明解国語辞典 第四版』

「ゆっくり」ーと，ーする

①時間をかけて、(時間にせかされないで) 落ち着いて何かをすることを表わす。

②何かをするのに余裕が有ることを表わす。

「ゆったり」①十分にゆとりが有って、楽なことを表わす。

②俗事にわずらわされず、のんびりとくつろぐことを表わす。

「のんびり」①〔時間的・（社会的）制約に従って振舞う必要が無かったり、またその必要を認めなかったりして〕心の向くままに行動することを表わす。

②〔目に見える動きや、緊張を起こさせる事情が無かったりして〕これに接する人に穏やかさを感じさせることを表わす。

全体的に、『日本国語大辞典』の記述の方が、さまざまな用法をもれなく説明しているようである。例えば『新明解国語辞典』では、「ゆっくり」について、①、②とも「何かをする」という記述がなされているが、「日が　ゆっくり　沈む」、「雲が　ゆっくり　流れる」のような自然現象は、この記述では説明出来ない。また、「ゆったり」について、①の「楽なこと」という記述は、身につけるものや家具などの説明としては良いが、「ゆったりした　山」、「ゆったりした　カーテン」のような例にはあてはまらない。「のんびり」については、①で主体自身の感じ方について、②で外から見た印象について、と分けて説明している点は評価出来ると思われるが、①と②の記述内容に接点が見られないのはどうであろうか。直観的に、①についても「穏やかさ」という観点がかかわって来るのではないかと思われる。

また、『日本国語大辞典』、『新明解国語辞典』とも、用法をいくつかに分けて説明しているが、本稿で行う意義素分析としては、これらを統合して説明することをめざす。

3．先行研究から

『基礎日本語辞典』には、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」とも見出しはなく、「ゆっくり」については「おそい」と「おもむろに」の関連語として二箇所に分けて説明してある。

「おそい」の所では、「遅く」と「ゆっくり」の違いについて、「遅く」には「何か標準となる速さや比較の対象」があるが、「ゆっくり」にはそのような基準はない、と指摘している。この点は適切であると思われ、また「遅く」と「ゆったり」「のんびり」との違いにもあてはまりそうである。

また、「ゆっくり」の説明としては「速度の絶対的なのろさで、急がないという気持ちがある（p.248）」（傍線は土岐による。以下同様。）と説明している。しかし、「歩く」や「走る」のような例は良いとして、「ゆっくり　考える」、「ゆっくり　眠る」

のような例は、「速度」という観点だけでは説明出来ない。また、「肉が　ゆっくり焦げる」、「川が　ゆっくり　流れる」のように、「急がないという気持ち」が想定出来ないものもある。これらのこともすべて含めて説明出来るように、更に分析を深める必要があると思われる。また、「ゆっくり歩く」は、急がないでのんびりスローテンポで歩く、の意である（p.248)」と説明中に「のんびり」が用いられているが、「のんびり」については分析がないため、「ゆっくり」と「のんびり」が、どの程度言い換え可能な共通部分を持っているのかは明らかでない。

また「おもむろに」の所では、「本来「ゆっくり」は、動きの速さではなく、ゆとりのあるさまをいう。(p.272)」として「ゆっくり二人が掛けられる席」「広い座敷ですから五人様でもゆっくりお休みになれます」を挙げ、そこから精神的なくつろぎを表す「どうぞごゆっくり」などの用法が派生し、さらに、急ぐ必要がないという気持ちが伴うことから、動作・動きのスピードの遅さへと意味が広がっていると述べている。本来というのが歴史的変遷をさかのぼることを指すのか、共時的に見た場合の中核的意味を指すのか明らかでないが、少なくとも共時的に見た場合、空間的・精神的ゆとりよりも、むしろ動作・動きにかかわるものの方が「ゆっくり」の中心的意味ではないかと思われる。

4．分　析

4.1.　構　文

意味分析にあたって、用例を構文的に次の二種類に分ける。

①ＮＰ$_1$ガ「ゆっくり」／「ゆったり」／「のんびり」ＶＰ

②「ゆっくり」／「ゆったり」／「のんびり」シタＮＰ$_2$

以下、基本的にこの構文に従って「ゆっくり」「ゆったり」「のんびり」の各々について見ていくことにする。また、

ＮＰ$_2$ガ「ゆっくり」／「ゆったり」／「のんびり」ダ

のような構文は、意味的には②に準じると考えられるため、特に言及しない。

4.2.　動詞句にかかる場合

4.2.1.　「ゆっくり」

(1)　彼は　ゆっくり　歩いた。

(2)　川が　ゆっくり　流れる。

(3)　室内の温度が　ゆっくり　上がる。

(4) 肉が　ゆっくり　焦げる。

(5)× ベンチが　ゆっくり　置いてある。

(6)× あの山は　ゆっくり　そびえている。

「ゆっくり」は(1)、(2)のような動作・動き、(3)、(4)のような変化を表す動詞と共起し、(5)、(6)のような、状態を表す「テアル・テイル」形などとは共起しない。しかし次のような例はどうだろうか。

(7) ゆっくり　考えてから　決めたほうが良い。

((8)? ゆったり　考えてから　決めたほうが良い。)

((9) のんびり　考えてから　決めたほうが良い。)

(10) 私は　日曜の朝は　ゆっくり　寝る。

((11)? 私は　日曜の朝は　ゆったり　寝る。)

((12) 私は　日曜の朝は　のんびり　寝る。)

(13) ゆっくり　していって下さい。

((14)? ゆったり　していって下さい。)

((15) のんびり　していって下さい。)

(16)× ゆっくり　生きる。

((17) ゆったり　生きる。)

((18) のんびり　生きる。)

これらの動詞は、具体的な動きや変化を特定するものではないが、時間的な「過程」を持っている。(13)の「ゆっくりする」は、具体的に何かを「する」のではなく、「長く滞在する」とほぼ同義に、やや慣用句的に用いられるものである。このような動詞は、ほとんどが「ゆっくり」で修飾することが出来る。ところが「考える」、「寝る（眠る)」のように、時間の流れの中で一つの行為としてとらえられるものは、「ゆっくり考える」、「ゆっくり寝る（眠る)」などの表現が成立するが、「ゆっくり生きる」や「ゆっくり生活する」などの表現は、普通は成立しない〈注1〉。「生きる」や「生活する」が、「ゆっくり」と共起しないのは、過程を持つ行為の中でも、始まりと終わりを自由に設定することが出来ず、その進行過程に十分時間をかける、ということが想定出来ないからである。

それに対して、(17)や(18)のように、「ゆったり」、「のんびり」は「生きる」というような、時間的に漠然とした内容を表す動詞にも用いることが出来る。「ゆったり」、「のんびり」は、「ゆっくり」と比較して、時間的な進行にはこだわらない。

また、次のような例はどうだろうか。これらはすべて、行為や変化を表すものであ

る。

(19)× 昨日　彼を　ゆっくり　見かけた。

((20)× 昨日　彼を　ゆったり　見かけた。)

((21)× 昨日　彼を　のんびり　見かけた。)

(22)× 良い考えが　ゆっくり　ひらめいた。

((23)× 良い考えが　ゆったり　ひらめいた。)

((24)× 良い考えが　のんびり　ひらめいた。)

(25)× 人込みで　サイフを　ゆっくり　無くした。

((26)× 人込みで　サイフを　ゆったり　無くした。)

((27)× 人込みで　サイフを　のんびり　無くした。)

「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」とも、(19)〜(27)のように、行為や変化であっても、時間的な「過程」を持たないものとは共起しない。また、次のように時間的ゆとりの想定出来ない場面でも、非文である。

(28)× 弾丸が　獲物目がけて　ゆっくり　飛んで行く。

((29)× 弾丸が　獲物目がけて　ゆったり　飛んで行く。)

((30)× 弾丸が　獲物目がけて　のんびり　飛んで行く。)

このように、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」が動詞句にかかる場合は、時間的なゆとりを持つものでなければならない。そしてその内、「ゆっくり」は最も制約が強く、「ゆっくり」がかかり得る動詞句の性質を考えてみると、「寝る（眠る)」、「休む」なども、疲れをいやすという目的に向かって進行していく過程を持ち、具体的動き・変化を表す動詞と共に、「進行過程」を持つ動詞であると言える。そこで、「ゆっくり」の意義素は、次のようにまとめられる。

時間的幅を持つ事柄が、時間的ゆとりを持って進行する、その過程の様態。

更に、次のような例も見てみよう。

(31)　まあ、まあ　ゆっくり　座って。お茶でもいかがですか。

(32)　ゆっくり　風呂に入って　疲れをとる。

(31)、(32)は、普通、それぞれ腰を下ろす動作、湯舟に入る動作ではなく、座っている時間、湯舟に入っている時間に焦点が合わされている。「座る」「入る」など、動作とその結果維持される状態とを合わせ持つ動詞の場合は、「ゆっくり」は、その結果の状態を持続することが、「休息」、「入浴」など、一つの行為として取り出せるものであるときは、その過程における時間的ゆとりを表すことが出来る。

『新明解』で「②何かをするのに余裕が有ることを表わす。」として挙がっている、

「飛行機には　ゆっくり　間に合う」、「日曜日は　ゆっくり　起きる」などの例も、めざす事柄（「間に合う」、「起きる」）にたどり着くまでに時間的ゆとりが有ることであり、「進行過程における時間的ゆとり」の拡大された用法として解釈出来る。

また、次の例は、「ゆっくり」が空間的ゆとりを表す例とされている。

(33)　ゆっくり　二人が掛けられる　席。(森田1989　p.272)

(34)　広い座敷ですから　五人様でも　ゆっくり　お休みになれます。

(　同上　)

しかし、「ゆったり」と比較して、次の(35)、(37)のように直接対象を修飾することは出来ない〈注2〉。

(35)× ゆっくりした　席。

((36)　ゆったりした　席。)

(37)× ゆっくりした　座敷。

((38)　ゆったりした　座敷。)

必ず動詞が必要とされる。そこで(33)、(34)のような例も、「ゆったり」はそれぞれ直接には「掛ける」、「休む」にかかり、それらの行為が時間的ゆとりをもって行われることを表していると考えられる。更に、次のように空間的ゆとりがないことを表す語とも自然に共起する。

(39)　狭苦しい所だが　ここなら（時間を気にせずに）　ゆっくり　休める。

以上のことから、空間的なゆとりは「ゆっくり」の意義素には含まれないと言える。

また、「休む」、「眠る」などにかかる例は、精神的なゆとりを表すとされるが、これらの「ゆっくり」も、本来、その行為が時間的ゆとりを持って行われることを表し、精神的なゆとりは、「休養」のための行為であるという、動詞の持っている意味的な特徴から二次的に出てくるものである。次の例は、精神的なゆとりのない場合に「ゆっくり」が共起する例である。

(40)　ピエロは　冷や汗を流しながら　ゆっくり　綱を渡った。

(41)　煙の中を　手探りで　ゆっくり　非常口へ這って行く。

同様のことは、「入念さ」や「じっくり」といった意味合いについても言える。「考える」、「観察する」など、人が集中力を要するような行為に「ゆっくり」がかかると、動詞の性質上、そのようなニュアンスが出てくるのであって、「川が　ゆっくり　流れる」、「雪が　ゆっくり　とける」のような場合には、「入念さ」というニュアンスはない。

多くの辞書に、「ゆっくり」の意味として、「落ち着いて」などの精神的ゆとりが挙

げられているのは、主体が主に人間である場合に限って、行為の過程の時間的ゆとりによって、二次的に精神的ゆとりが導き出されるということであり、本来の「ゆっくり」の意義素には、精神的ゆとりは含まれていない。

4.2.2.　「ゆったり」

(42)　彼は　ゆったり　歩いた。

(43)　川が　ゆったり　流れる。

(44)× 室内の温度が　ゆったり　上がる。

(45)× 肉が　ゆったり　焦げる。

(46)　ベンチが　ゆったり　置いてある。

(47)　あの山は　ゆったり　そびえている。

「ゆっくり」の場合の例文(1)〜(6)と比較すると、「ゆっくり」は、「置いてある」、「そびえている」などの、進行過程を持たない動詞句と共起しなかったが、「ゆったり」は、「肉が焦げる」、「温度が上がる」などの変化を表す動詞句とは共起しない。それ以外の動詞句は、進行過程の有無にかかわらず「ゆったり」で修飾出来る。

さらに次のような例も「ゆったり」とは共起しない。

(48)× 彼は　ゆったり　白髪になる。

これら「ゆったり」が非文である例は、色や温度にかかわるものなど、どれも空間的な広がりを伴わないものである。そこで、「ゆったり」には、空間的な量感が深くかかわっているのではないかと推測される。まず(46)、(47)のような例を中心に、この点についてもう少し詳しく見てみよう。

(49)　あの山は　ゆったり　そびえている。〔＝(47)〕

(50)　大木が　ゆったり　たっている。

(51)?? 消しゴムが　ゆったり　おいてある。

(52)?? 糸くずが　ゆったり　ついている。

主体は、大きいものの方が、小さいものよりずっと落ち着きが良い。しかし、単に主体の大小そのものだけが、問題になるわけではない。例えば、(51)の消しゴムでも、次のような例文では自然である。

(53)　消しゴムが　箱に　ゆったり　つめてある。

更に次のような例もある。

(54)　包帯が　ゆったり　まいてある。

(55)　カーテンが　ゆったり　下がっている。

これらは、大小にかかわらず、ある物が、空間的ゆとりを伴って存在している場合である。そこで、(49)、(50)のような例についても、単に主体そのものの質量の大きさだけを表しているのではなく、その様子に感じられる空間的ゆとりを表していると考えられる。

以上は状態を表す例であるが、次に動作について見てみよう。まず、空間的な状態とかかわりの深いものを次に挙げる。

(56) ベンチを　ゆったり　置く。

((57) ベンチを　ゆっくり　置く。)

(58) 窓を　ゆったり　開ける。

((59) 窓を　ゆっくり　開ける。)

これらは、どれも動作の様態と、結果の状態と二とおりの場合が想定出来る。しかし、普通は、「ゆったり」はその動作の結果の状態にかかると解釈される。つまり、それぞれ「置かれたベンチの状態」、「開けられた窓の状態」に空間的ゆとりをもたせることを表すのである。よって、(56)、(58)で表される内容は、次のようなものに近い。

(60) ベンチが　ゆったり　置いてある。〔=(46)〕

(61) 窓が　ゆったり　開いている。

これに対して、「ゆっくり」を用いた場合は、その動作の進行中の様態を表す。つまり、(57)、(59)で表される内容は、それぞれ次のようなものである。

((62) ベンチを　ゆっくりした動作で　置く。)

((63) 窓を　ゆっくりした動作で　開ける。)

このことから、「ゆったり」は、「ゆっくり」と比較して、動作の動きそのものよりも、結果の状態を主として修飾することがわかる。

また、動詞の意味特徴として、動作の結果、状態に空間的ゆとりが少なくなるようなものは、「ゆったり」とは共起しない。

(64)× 彼は　ゆったり　身を縮めた。

((65) 彼は　ゆっくり　身を縮めた。)

((66) 彼は　のんびり　身を縮めた。)

(67)× 彼は　ゆったり　しゃがみこんだ。

((68) 彼は　ゆっくり　しゃがみこんだ。)

((69) 彼は　のんびり　しゃがみこんだ。)

(70) 彼は　ゆったり　伸びをした。

(71) 彼は　ゆったり　立ち上がった。

更に、動作の様態に空間的ゆとりの想定しにくい、次のようなものも非文である。

(72)× 彼は　ゆったり　毛虫をつついた。

((73)　彼は　ゆっくり　毛虫をつついた。)

((74)　彼は　のんびり　毛虫をつついた。)

(75)× 彼は　ゆったり　鼻をすすった。

((76)　彼は　ゆっくり　鼻をすすった。)

((77)　彼は　のんびり　鼻をすすった。)

以上述べてきたように、「ゆったり」には、空間的ゆとりが深くかかわっている。

しかし、「話す」や「考える」などは、その行為に、空間的な状況があまりかかわってこない。そこで次に、このような動詞に「ゆったり」がかかる例について見てみる。まず、「ゆったり」が共起するのは次のような動詞である。

(78)　彼は　ゆったり　考えた。

((79)　彼は　ゆっくり　考えた。)

((80)　彼は　のんびり　考えた。)

(81)　彼は　ゆったり　話した。

((82)　彼は　ゆっくり　話した。)

((83)　彼は　のんびり　話した。)

それに対して、次のようなものは非文である。

(84)× 彼は　ゆったり　怒鳴った。

((85)　彼は　ゆっくり　怒鳴った。)

((86)× 彼は　のんびり　怒鳴った。)

(84)〜(86)は、動作の様態に、精神的ゆとりが想定出来ない例である。このように、空間的ゆとりがかかわってこない場合には、「ゆったり」は、むしろ精神的ゆとりを表すようになる。そこで、次のように様態の特定されない、やや抽象的な動詞についても用いることが出来る。

(87)　彼は　ゆったり　生きる。

この場合も、「満ち足りたゆとりある人生を送る」ということで、空間的なものよりも、「のんびり」に相通じるような、精神的、心情的なゆとりが中心に据えられた表現である。

このように、「ゆったり」は、空間的なゆとりを中心として、更に精神的ゆとりをも表すことが出来る。「ゆったり」が、空間的ゆとりを表す場合でも、単に物理的な質量の大きさや、空間的広さのみを表すわけではなく、「満ち足りた」というような、

情緒的なゆとりの意味を合わせ含んでいるのである。

4.2.3.　「のんびり」

「ゆっくり」、「ゆったり」と違い、「のんびり」は、主体が有情物か無情物かで用いられ方に違いがある。

(88)　彼は　のんびり　歩く。

((89)　彼は　ゆっくり　歩く。)

((90)　彼は　ゆったり　歩く。)

(91)× 水が　のんびり　流れる。

((92)　水が　ゆっくり　流れる。)

((93)　水が　ゆったり　流れる。)

基本的に、主体が有情物である場合は適格だが、無情物では非文であることが多い。そこで、まず有情物について考え、次に無情物をとりあげる。

「のんびり」が、最も自然に使えるのは人である。

(94)　彼は　のんびり　走った。

(95)　彼は　のんびり　寝ころんでいる。

(96)　彼は　のんびり　生きる。

人の振る舞いであれば、大概のものは「のんびり」と共起する。また、「バス」のように、人の意志によってその動き方をコントロールするものは、やはり「のんびり」と共起する。

(97)　バスが　のんびり　走る。

しかし、「のんびり」は「ゆっくり」と違って、精神的ゆとりの無い状況では用いることが出来ない。

(98)× ピエロは　冷や汗を流しながら　のんびり　綱を渡った。

(99)× 煙の中を　手探りで　のんびり　非常口へ這って行く。

このように、「のんびり」があると、それぞれ、命がけの曲芸や火災の起きた非常時の場面を想像しにくくなる。この、精神的ゆとりという点で、空間的な状況に焦点が置かれない場合の、「ゆったり」の用法と重なってくる。人の場合、主体自身が精神的緊張を感じないで行動することと、その様子に緊張感を伴わないことは、表裏の関係にある。

また、緊張感とは相入れないという点から、緊迫を伴う激しい動作とも共起しない。

(100)× 彼は　全速力で　のんびり　走った。

この点で、進行過程における時間的ゆとりを表す、「ゆっくり」と重なる部分がでてくるのである。

この、緊張感がないという点は、人以外に「のんびり」が用いられる場合についても同様である。

人以外の有情物では、次のようなものが最も典型的な例である。

(101) 馬が　のんびり　草をはんでいる。

(102) 小鳥が　のんびり　さえずっている。

しかし、次の(103)、(105)のような例はかなり許容度が落ちるのではないだろうか。

(103)?? 馬が　のんびり　振り向いた。

((104) 馬が　ゆっくり　振り向いた。)

(105)?? 小鳥が　のんびり　巣を作る。

((106) 小鳥が　ゆっくり　巣を作る。)

(107) 彼は　のんびり　振り向いた。

(108) 彼は　のんびり　小屋を作る。

人以外の有情物の場合、主体自身が精神的ゆとりを持って行動すると考えられる例は、擬人法に近くなる。そのため、(107)や(108)に対して、(103)や(105)は不自然に感じられる。しかし、(101)や(102)のように、その光景（有り様）に緊張感のない、くつろぎが感じられる場面では、ごく自然に「のんびり」が用いられる。

次に無情物では、多くのものが非文である。

(109)× 水道の水が　のんびり　あふれる。

(110)× 室内の温度が　のんびり　上がる。

(111)× 机が　のんびり　置いてある。

このように、普通、主体が無情物の場合、動き、変化、進行のない状態、どれもが「のんびり」とは共起しない。しかし、かなり許容度の高い、次のような例もある。

(112)? 小川が　のんびり　流れる。

(113)? 野原で　ススキが　のんびり　ゆれる。

動詞を「テイル」形にすると、更に落ち着きが良くなる。

(114) 小川が　のんびり　流れている。

(115) 野原で　ススキが　のんびり　ゆれている。

「小川」や「野原のススキ」など、その光景にくつろぎの感じられる場面では、「テイル」形で、その情景を思い浮かべやすくすると特に、「のんびり」が自然に用いられる。この場合は、主体が無情物であるから、主体自身がくつろいでいる訳ではなく、

その有り様に、緊張感のない、くつろいだ感じを伴っていることを表している。

以上述べてきたことをまとめると、「のんびり」は、緊張感のない、精神的くつろぎのある有り様を表すということになる。多くの場合、主体自身が精神的くつろぎを感じているために、そのような有り様になるのであるが、主体自身が感じるくつろぎは、必要不可欠なものではなく、無情物についても、その有り様にくつろぎが感じられれば、「のんびり」と言い表すことが出来る。

4.3. 名詞句にかかる場合

4.3.1. 「ゆっくり」

(116) ゆっくりした 歩き方。

(117) ゆっくりした 滞在。

(118) ゆっくりした 流れ。

4.2.1. で見たように、ある時間的幅があり、「進行過程」を持つ名詞句は、基本的に、総て「ゆっくりした」と共起する。その場合、時間的ゆとりが想定出来るものでなければならないことも同様である。

そしてまた、その性質として、ある一定の動きや変化（進行過程）を備えているものも可能である。

(119) ゆっくりした 川。

(120) ゆっくりした 信号。

しかし、動くものでも次のようなものは非文である。

(121)× ゆっくりした 人。

「人」やその他の生き物は、その性質として、進行過程を備えているわけではない。そのため、「ゆっくり」がかかる動詞句の主体になることは出来ても、「ゆっくりした」の被修飾語としては不適格である。このように、「ゆっくりした」がかかる名詞句は、その性質として進行過程を含むものに限られる。よってほとんどのものは、次の(122)、(123)のような具体物であっても、(124)、(125)のような抽象物であっても「ゆっくりした」とは共起しない。

(122)× ゆっくりした 椅子。

(123)× ゆっくりした 部屋。

(124)× ゆっくりした 雰囲気。

(125)× ゆっくりした 性格。

4.3.2.　「ゆったり」

「ゆっくりした」と異なり、「ゆったりした」は、進行過程を含まないものに、広く用いる事が出来る。まず、具体物が考えられる。

(126)　ゆったりした　山。

(127)　ゆったりした　大木。

上の例は、物自身に質量感のある場合である。それに対して、それ自体に質量感のない物は、「ゆったりした」で修飾出来ない。

(128)× ゆったりした　消しゴム。

(129)　消しゴムが　箱に　ゆったり　つめてある。〔=(53)〕

この点が、動詞句を修飾する場合と異なる点である。

また、つぎのような例もある。

(130)　ゆったりした　ハンカチ。

(131)　ゆったりした　靴。

(132)　ゆったりした　部屋。

(133)　ゆったりした　運動場。

これらは、物が、それぞれの使用目的に対して、十分な大きさ（空間的ゆとり）を、自身に備えている場合である。「ゆったりした　ベンチ」と言えば、ベンチそのものがゆとりある大きさであることを表し、「ベンチが　ゆったり　置いてある〔=(46)〕」のように、ベンチの周囲に空間的ゆとりがあるかどうかにはかかわらない。

次に抽象物も考えられる。

(134)　ゆったりした　雰囲気。

(135)　ゆったりした　気分。

(136)× ゆったりした　知識。

抽象物の場合、「ゆったりした」で表される「ゆとり」は、雰囲気や気分など、感覚的、情緒的なものにはあてはまるが、そうでないものには不自然である。「ゆったりした」は、「ゆとりのある」とか「豊かな」という表現に比べて、多分に、話者の心情的な感覚を表す表現である。

それ以外では、4.2.2. で見たように、空間的、あるいは精神的ゆとりの想定出来る、動きや行為を表す名詞句にかかる。

(137)　ゆったりした　流れ。

((138)　ゆっくりした　流れ。〔=(118)〕)

(139)　ゆったりした　歩き方。

((140)　ゆっくりした　歩き方。)

(141)　ゆったりした　生活。

((142)× ゆっくりした　生活。)

((143)　のんびりした　生活。)

このようなものは、ほとんどが「ゆっくりした」で置き換える事が出来る。しかし、(141)〜(143)のように、進行過程が特定されない「生活」などの場合は、「ゆっくりした」では非文であり、精神的な側面に焦点があてられることになる。

また、それ自身の空間的有り様と、動きの両面を含む物については、それらをひっくるめて修飾する。

(144)　ゆったりした　風。

((145)　ゆっくりした　風。)

(146)　ゆったりした　川。

((147)　ゆっくりした　川。)

(148)　ゆったりした　人。

((149)× ゆっくりした　人。〔=(121)〕)

((150)　のんびりした　人。)

(144)は、穏やかな、たっぷりした風を、(146)は、流れの緩やかな、川幅のある川を表す。(148)の「人」については、空間的有り様や、動きそのものについてではなく、態度や性格から感じられる、精神的ゆとりの有る様子を表している。かかる内容が特定しにくいため、やや落ち着きは悪いが、許容される表現であろう。

4.3.3.　「のんびり」

4.2.3. と同様に、人にかかわるものは、名詞句についてもすべて自然である。

(151)　のんびりした　人。

(152)　のんびりした　性格。

(153)　のんびりした　生活。

しかし、人以外の有情物については、それ自身の性質として、人の性格のように精神的なくつろぎ感を伴っている状況は想定しにくいため、直接に修飾対象とするとやや不自然である。

(154)? のんびりした　馬。

(155)? のんびりした　小鳥。

また、くつろぎを想定出来る（緊張感を伴わない）行動や動きにかかる。

(156)　のんびりした　話し方。

((157)　ゆっくりした　話し方。)

((158)　ゆったりした　話し方。)

(159)　のんびりした　流れ。

((160)　ゆっくりした　流れ。〔=(118)〕)

((161)　ゆったりした　流れ。)

このように、行為や動きにかかる場合は、「ゆっくり」、「ゆったり」とも相互に置き換え可能であり、ほぼ類似の状況を示すことになる。

また、「ゆっくりした」は、有情物、無情物とも、ほとんどのものに非文であり、「ゆったりした」は、逆にほとんどのものに自然であったが、「のんびりした」は、無情物については、非文であるものと、自然なもの、更に状況によって揺れるものとが有る。次の(159)〜(163)は具体物、(164)〜(166)は抽象物の例である。

(159)× のんびりした　風。

(160)× のんびりした　椅子。

(161)? のんびりした　部屋。

(162)? のんびりした　野原。

(163)? のんびりした　風景。

(164)× のんびりした　知識。

(165)　のんびりした　雰囲気。

(166)　のんびりした　気分。

(159)、(160)のように、無情物の多くは非文である。しかし、(161)〜(163)のような場所や場面については、状況次第で「のんびりした」が用いられる。(163)について、例えば次のように状況を補ってみれと、ごく自然な文である。

(167)　のんびりした　田園風景。

場所を表す例についても、考えてみよう。

(168)　のんびりした　バスの車内。

(168)は、状況として、誰も乗っていない、座席だけが並んでいる車内をみて言うのはかなり不自然であろう。乗客がいて、各自、気ままにうたた寝をしたり、窓から景色を眺めたりしている光景が、まず思い浮かぶ。そして(161)〜(163)は、それぞれ次のように言い換えられる。

(169)　のんびりした　雰囲気の　部屋。

(170)　のんびりした　雰囲気の　野原。

(171)　のんびりした　雰囲気の　風景。

つまり、のどかなくつろぎを、その場の雰囲気として感じられるものは、無情物であっても、「のんびりした」で修飾出来るのである。

また、(164)〜(166)のような抽象物については、「ゆったりした」と同様、「雰囲気」や「気分」など、感覚的で、話者の情緒が入り込む余地の有るものは自然であるが、そうでないものは非文である。

5．おわりに

「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」は、本質的に、瞬間的な、あるいは激しい動きや変化とは相入れない。この点で、相互に似通った性質を持っており、従来、辞書の記述でも、一方の語の説明に他方が用いられるということが多かった。

しかし、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」が、類義語として相互に置き換え可能なのは、人が主体である場合の、進行過程を含む行為を表す語句にかかる場合に限られる。その場合には、「ゆっくり」の二次的特徴として出てくる「精神的ゆとり」と、「ゆったり」の持つ「精神的に満ち足りたゆとり」、更に「のんびり」の「精神的くつろぎ」が、類似のものとして重なってくるのである。

ところが、特に名詞句にかかる場合には、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」は、全く異なった振る舞いを見せる。時間的ゆとりを意味的な核とする「ゆっくり」は、最も制約が強く、いわゆる「物」には、ほとんどの場合用いることが出来ない。それに対して「ゆったり」は、最も広く、ほとんどあらゆる「物」に用いることが出来る。しかし、空間的なゆとりの想定出来ない物では、非文となるのである。また「のんびり」は、人にかかわるもの、あるいは人が見て精神的くつろぎを感じられるものに限って用いることが出来る。

以上の分析により、「ゆっくり」、「ゆったり」、「のんびり」の意義素を次のようにまとめる。

「ゆっくり」　時間的幅を持つ事柄が、時間的ゆとりを持って進行する様子。

「ゆったり」　空間的（精神的）ゆとりのある様子。

「のんびり」　緊張のない、精神的くつろぎが感じられる様子。

〈注1〉

しかし文脈的に、「生きる」を、例えば学校を出て、就職して、家庭を持って・・・のように、その中にさまざまな進行過程を含むものとしてとらえるような場合には、

その進行過程に時間的ゆとりを持つことも想定出来、「僕は人生を　ゆっくり　生きるんだ」のような表現も、成立する。

〈注２〉

従来の多くの辞書には、空間的ゆとりを表す例として、「ゆっくりした　靴」「ゆっくりした　ガウン」のような用例が見られる。また、北村1985でもこのような用例について記述がなされている。

しかし筆者も含めて、複数の日本語ネイティブ（いずれも20代、東京出身の、国語学を専攻する大学生、院生、助手の方々）の判定では、上記のような例文は完全な非文である。しかし東京出身者であっても、年配の人の間では普通に使われるようであるが、同時に、同じ用法の「ゆったり」に比べて、訛った言葉という意識も見られるようである。本稿では、それが直接の目的ではないため、本格的な調査はしなかったが、方言とのかかわりも含めて、「ゆっくり」の空間的用法が、地域的、世代的にどの程度の広がりをもっているのかは、また一つの問題であると思われる。仮説として、「ゆっくり」の空間的用法は、若年層を中心に死用法となりつつあると言えるかもしれない。

本稿では、筆者の内省を中心に論を成したが、現時点では、社会的に、「ゆっくり」の空間的用法がかなり見られるらしい点に、注意しておかなくてはならない。

／参考文献／

日本大辞典刊行会1972～1976　『日本国語大辞典』　小学館

山田忠雄他編1989　『新明解国語辞典第四版』　三省堂

森田良行1989　『基礎日本語辞典』　角川書店

文化庁1975　『外国人のための基本語用例辞典第二版』　大蔵省印刷局

森山卓郎1988　『日本語動詞述語文の研究』　明治書院

北村仁美1985　「様態副詞「ゆっくり（と）」の意味記述－述語動詞との共起関係から－」（『国語学研究 第25集』東北大学文学部「国語学研究」刊行会）

言語経歴：1968年９月　東京都練馬区生まれ

０才～６才　東京都練馬区

６才～　東京都世田谷区

（とき　るみえ・東京都立大学大学院生）